

【人參】

「万病に効あり」といわれる薬用人参はウコギ科に属し、食用にしているセリ科のニンジンとは全く異なります。人参の有効成分は脂溶性成分としてパナキシロール、サポニン群にはパナキロン、パナキソサイドなどがあります。薬理作用として、古くから強壯、強精、造血、健胃、精神安定、鎮静作用などが知られています。

実験的に肝細胞の核RNAの合成を目標に腹腔内投与をしますと、RNAのとりこみを促進します。また血清蛋白の合成も促進しますが、とくにアルブミン合成を促進するという、一種の代謝亢進作用があります。糖代謝ではアドレナリン過血糖に対する抑制効果が知られています。また単独でも血糖値の低下を示しますが、副腎摘出動物においてとくに血糖低下作用が著明です。

人参は肝臓でも脂質合成促進作用があり、特徴としては脂肪組織における脂質の蓄積作用です。骨髄細胞、睾丸精巣細胞においても細胞分裂、DNA合成を促進します。また担癌動物（ガン細胞を植え付けた動物）では、ガン細胞そのもののDNA、蛋白質、脂質合成には影響を与えませんが、宿主側の代謝を改善しています。

正常動物に人参を与えた場合、グリコーゲンの分解促進、血糖減少傾向が認められますが、絶食後ではグリコーゲンのとり込みが高まるという矛盾した現象が認められます。脂質合成の促進も、正常に食物を与えた動物にみられますが、絶食後の動物では対照群と殆んど変わりません。つまり人参の作用は、生理的状況に応じて異った働きを示すわけで、代謝調整作用は正常範囲にとどまる、といえます。

従ってクスリとして人参は、蛋白質、糖、脂質代謝に対し、正常なホメオスターシス（恒常性）の維持のみに働くと考えられます。体力の消耗した陰証の病人の場合に人参は有効でしょうが、反対に陽証の人に対しては全く無効であり、意味がないと考えます。

「春は花、秋は月、気付は人参」とし、万病の霊薬として珍重されていますが、あくまで、ある病態に対するクスリであり、健康増進のクスリというものは漢方的に全くありません。